

【研究ノート】

初期王朝時代Ⅰ期のハムリン盆地における 社会形成に関する考察*

A Study of Social Formation in the Hamlin Basin during the Early Dynastic I

神 田 翔 太 郎**

イラク中部、ディヤラ川流域のハムリン盆地（現ハムリン湖）では、メソポタミアの長方形のプランをもとにした伝統建築から逸脱した円形建物がジェムデッド・ナスル期のテル・グッパ第Ⅶ層から発見されている。この時代の遺跡は他に確認されていないが、次の初期王朝時代Ⅰ期には、円形遺構、墓域を持つ遺跡が複数確認されるようになる。つまり、遺跡数の増加が指し示すことは、人口の増加がこの地域、この時期にあったということをうかがわせる。これを踏まえて本稿では、各遺跡の位置関係から、遺跡毎で機能（祭祀、行政、墓域）が分化し、それぞれが連帯した形で社会生活が営まれていたということを考察した。さらに、これらの遺跡からは、メソポタミアの土器の中でも特徴ある緋色の顔料を使った「スカーレット・ウェア」が出土している。これを踏まえて、彩文土器の機能論についても言及した。

キーワード：メソポタミア、ディヤラ川、円形建物、初期王朝時代Ⅰ期

はじめに

本稿で指すハムリン盆地は、大まかに言うとディヤラ川流域のハムリン山脈¹以東からナスズ山脈の範囲を指す。メソポタミア中部、特にハムリン盆地は、メソポタミア南部と北部の文化圏に挟まれている地域でもあり、イランの文化圏からもメソポタミア南部や北部と比べて近い位置関係にある。ハムリン盆地内では、小麦や大麦が栽培されているが、年間平均降水量が250mm－300mmで、天水農耕の限界耕作地帯である。中部地域の東側には、ザグロス山脈が連なっており、遊牧民の宿営地として適していたと考えられている（藤井 1981：p. 15）。ディヤラ川流域は、交易路としても使われていた。例えば、アフガニスタンのバダクシャン地方へ行く際は、ディヤラ川からイランの

* 受付日 2021年10月21日 受理日 2021年12月15日

** 国士舘大学グローバルアジア研究科

1 ハムリン山脈をシュメル語では“EN.TI”と呼称されていた（Steinkeller 1981：p. 163）。ステインケラーによると、この地域は、アッカド帝国の直轄領地の一つとして認められるという（Steinkeller 1981：p. 164）。

ホラサーンを経由して行く交易路が知られている (Strange 1905 : pp. 60-62)。このディヤラ川流域をおさえたエシュムンナは、イシン・ラルサ時代に、ユーフラテス川方面まで影響力をおよぼしていた可能性が指摘されている (小口 2002 : pp. 108-109)。

ハムリン盆地内では、先史時代、すなわち前5千年紀のウバイド期において、すでに定住が確認される遺跡、テル・ソンゴルAとテル・マドフルなどがある。しかし、テル・ルベイダを除き、ウルク期の層位を持つ遺跡は、現状発見できていない (Tabl. 1を参照)。さらに、ウルク期の次期に当たるジェムデッド・ナスル期の遺構は、テル・グッバの第Ⅶ層のみであり、ここでは最大径約80mに及ぶ巨大な同心円状の建築遺構が発見されている。一方、その後の初期王朝時代Ⅰ期では、テル・グッバを含め円形建築遺構と墓域の遺構を伴う遺跡が複数発見されている (Young and Killick 1988 pp. 4-5)。

Table 1 : ハムリン盆地内の各遺跡ウルク後期から
初期王朝時代Ⅰ期までの簡潔な年表
(Young and Killick Fig. 4を参考に作成)

BC3300-3100 ←→	BC3100-2900 ←→	BC2900-2750
ウルク後期	ジェムデッド・ナスル期	初期王朝時代Ⅰ期
Tell Hassan		
Tell Rubeidheh		
	Tell Gubba : VII	Tell Gubba : VI- IV
		Tell Songor
		Tell Razuk
		Tell Sabra
		Kheit Qasim
Ahmed al-Hattu	Ahmed al-Hattu	Ahmed al-Hattu
		Tell Madhhur
		Tell Suleimeh
		Abu Qasim
		Yelkhi
		Tell Hassan
		Uweisat

この遺跡数の増加に関して、ハムリン盆地内がディヤラ川下流域以南の勢力による植民地²となっていた可能性を論じた「植民地化説」や遊牧民の「キャラバンサライ説」がある (Renette 2009 pp. 90-91, Forest 2011 pp. 29-30)。レネッテは、ハムリン盆地内の遺跡数の増加に関して、ザグロス山脈の勢力を視野に、スシアナ地域との関係性を指摘している (Renette 2009 p. 94)。これは、

2 スカーレット・ウェアがディヤラ川下流域から供給されていたという理論で、現在は、スカーレット・ウェアの出自について、不明ではあるものの、ブラボなどによってデ・ローランなどイラン側からの影響が指摘されている (Bravo 2014 : pp. 139-141)。

植民地化説に対する反論であり、その根拠として、ハムリン盆地内の円形建物の平面プランが、ディヤラ川下流域やメソポタミアの伝統的な平面プランと一線を画すというものである（同上）。総合的に、イラン側からの視座でハムリン盆地内の遺跡増加に関する要因を考察しているものの、各遺跡の位置関係に関しては、未だ研究が不十分であると思える。そこで、この研究ノートでは、各遺跡の位置関係や機能を考慮し、初期王朝時代Ⅰ期におけるハムリン盆地内の社会的連帯に関して考察していきたい。

ジェムデッド・ナスル期と初期王朝時代Ⅰ期におけるハムリン盆地内の遺跡

テル・グッバ第Ⅶ層：Tell Gubba

国士舘大学の藤井等により調査が行われたテル・グッバは、ディヤラ川とナリン川の合流地点の近くに位置している（Fig 11-①）。円形建物の構造（Fig. 1）は、中心の円形基壇を囲むように5重の周壁（CW3～CW8）が設置され、これら周壁の間を回廊（C2～C6）が廻っている。CW5までの周壁が、上部構造を伴う一つの建物として、独立しており、そのまわりをCW6、CW7とCW8が囲んでいる。またCW7とCW8の間には周壕が掘られていた。建物の内部構造と平面プランに目を向けてみると、CW4とCW5の北側に突出部が設けられており、それらの突出部は部屋（CW4の突出部：R3；CW5の突出部：R4井戸部屋）になっている。R3は、C4から中心部のC3へ通じる出入口の役目を担っている。特徴としては、C4から中心へ行く際の動線が、直線ではなく、くの字に曲がるという点である³。

3 動線の同一軸上ではない例を挙げると、ウバイド・プランなどに見られる、90°曲がる動線計画の「曲り軸」= "Bent-axis approach" などがある。対して、テル・グッバの円形建物は、周壁ごとに設置されている出入口が、同一軸上に属さず、また弧を描いたような回廊によって、次の出入口への動線が、Z字状になっている。

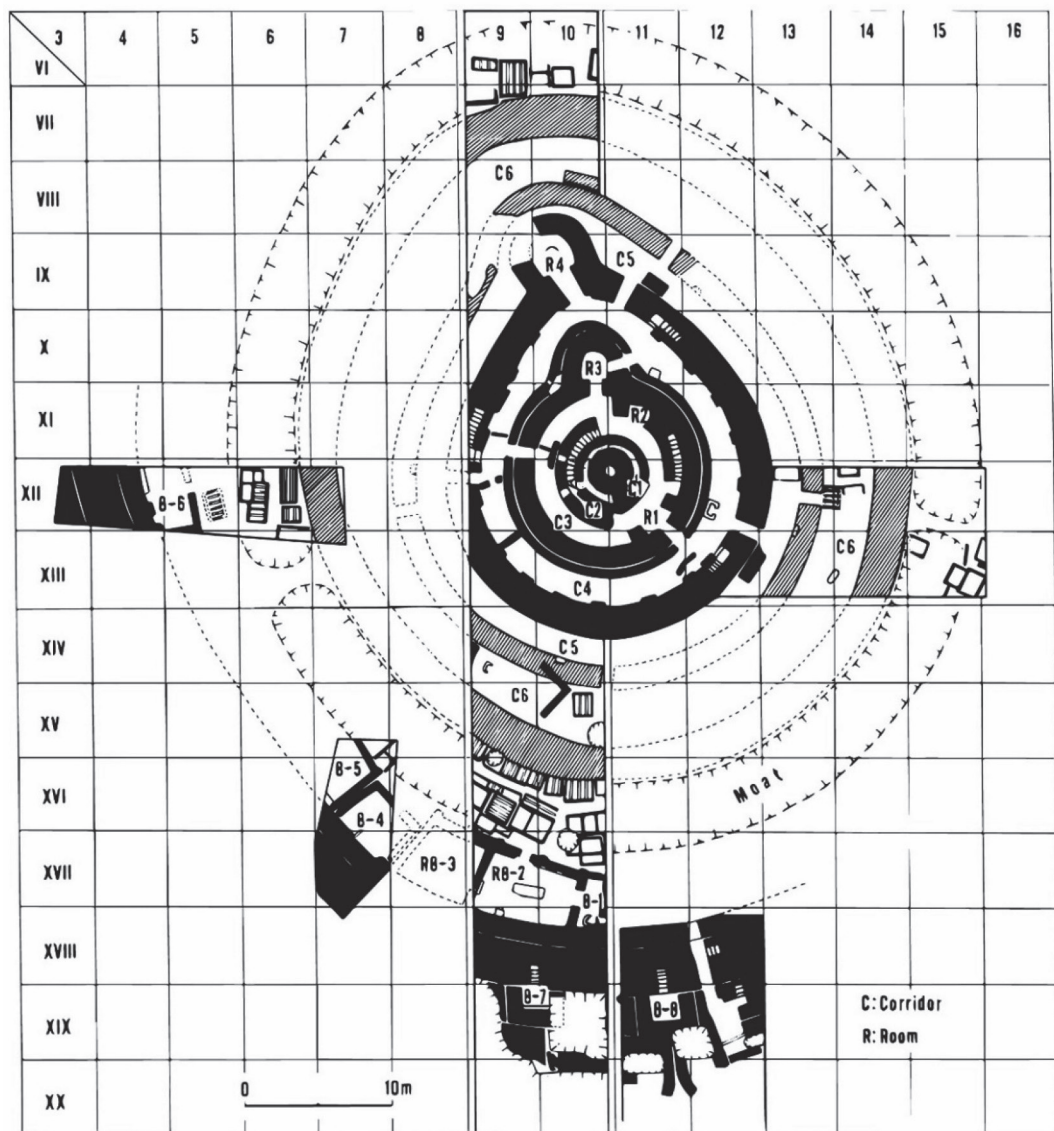


Fig. 1 テル・グッパ第Ⅶ層の円形建物
(Ii 1993 : Fig. 1 引用)

上部架構技術の観点から考えた場合、CW3,4とCW4,5は内側に迫り出しており、持送り式ヴォールト（Corbel vault）をなしている。また、出入口には持ち送り式アーチ（Corbel arch）を採用しており、かつW4の壁に造られている控え壁の構造も同様に、持ち送り式アーチを採用している。CW8に関して言えば、壁厚が約10mに達する部分も確認され、極めて防備に徹していたと考えられている（小谷・井 1981 : pp.20-21）。

テル・グッパ第Ⅶ層の円形建物の機能に関しては未だ明白な答えは出されていないのが現状であ

る。しかしながら「穀物庫」、「神殿」、「防御施設」の3機能のいずれかが、テル・グッパを含め、類似した平面プランを有するテル・スーク・サギール (Tell al-Suk Sagir⁴)・テル・マディヤーナ (Tell al-Mdyana)⁵・テル・ナメル (Tell al-Niml)⁶の円形建物から考えることができよう (Burhan 2002 : pp. 1-27, 2011 : pp. 385-394)。特に、テル・グッパに関して言えば、CW8の存在から、「防御施設」としての機能が考えられている (藤井 1981 pp. 126-127)。防御施設以外としては、地理的要因からキャラバンサライ (交易路上の宿場) との見解もある (Forest 2011 : pp. 34-35)。またテル・グッパの復元案 (ドーム構造) を元にサイロとしての「穀物庫」や、動線・円形基壇上の炉と横穴といった要素から「宗教的」な機能も提示されている (岡田 1993 : pp. 62-72)。

第Ⅵ層－Ⅴ層

テル・グッパの第Ⅵ層と第Ⅴ層 (Fig. 2) では、第Ⅶ層の円形建物が放棄され、小型の方形プランの小部屋群によって占められる。これらの層では、円形建物を構築していた周壁 (特にCW5の外側) を一部利用し、放射状に小部屋が築かれていた。また、最外郭部の周壁、CW8も同様に機能していたと考えられている (小谷・井 1981 : pp.24-25)。あくまで想像の域をでないが、小部屋群が放射上に広がったプランであるゆえに、これらを囲む周壁としてCW8が次の時代まで継続的に利用されていたのではないだろうか。

各小部屋は、大小の大きさの差異はあるものの、方形プランから逸した建物は確認できない。大型の建物に関しては、長辺を3として、短辺を1とする3:1の比率になっている。一部には、短辺の内壁部にベンチ状の台を設け、さらに、長辺の中央部に出入口を設けている点などからして (小谷・井 1981 : pp.25-26)、曲り軸 (Bent axis approach) の動線計画が思い浮かばれる。この大型建物の機能に関して、発掘者は明言していないが、これら動線計画から見れば宗教的な施設を連想

4 アダイム川中流域に位置し、初期王朝時代Ⅰ期に属する単層のテルである。100m離れた位置に後期ウルクから初期王朝時代Ⅰに相当する集落?遺跡がある。テル・スーク・サギールの円形建物は3つの周壁によって構築されている。また回廊5, 7はそれぞれ扉が設置されているのが、認められる。特にC7に関しては、「階段」と指摘されており、上部構造の存在を思わせる。

5 アダイム川中流域に位置し、単層のテルである。また、テル・スーク・サギールと近接しており、時代も初期王朝時代Ⅰ期に属している (Brhan 2011)。テル・マディヤーナの円形建物は、セクションが12×10mの円形プランであり、中心に設けられている径約5mの円形プランの部屋を取り巻く2重の周壁によって構築されている (Brhan, 2011 p. 390)。

6 ティグリス川と小ザブ川の合流点に位置し、三層を有しているテルである。またアッシュールから南東16kmという近接した場所にこの遺跡はある。このテルの第1層目は、中期アッシリア時代に属し、第2層目は初期王朝時代Ⅱ期に相当する。第3層目は、ウバイド期に属している。本稿で取り扱う円形建物の建築遺構が属している層は、第2層であり、二段階の改築が認められている (Brhan 2001 : p. 7-9)。テル・ナメルの円形建物の建築プランは、中央部の空間[R32]を囲むように回廊と周壁が造られている。またR32を構成している周壁を含め円形建物は、6壁の周壁によって構築されている。特に、第2壁に設けられている空間は、発掘者が、儀式用の供物を保管する貯蔵庫と推察している (Brhan 2001 pp. 11-12)。

することができるのではないだろうか。

一方で、小型の建物は、大型建物に付随する形で分布し、周囲から炭化した穀物が出土していることから、主たる機能は貯蔵庫だと考えられている(同上)。これらの貯蔵庫の床面は、時には約80cmも基部から高く、床面下には複数の通気孔(ベンチレーション)が方向を違えて数段設けられている場合がある(通常は1段)。これは、何回も床面を貼り直した可能性を指し示している。

各部屋群をつなぐ通路は、大半が幅1mほどで、広くても2mである。特筆すべきは、この通路から大量のスカレット・ウェアの破片が出土している点である。特に大型建物の周辺から集中して出土していることが確認されている(小谷・井 1981 : p. 27)。全体的に俯瞰すれば、一見無計画に建物が構築されているように見えるが、大型建物に隣接した場所に比較的幅が広い通路が、設けられている。逆に言えば、全体のプラン上では大型建物を中心とした区画があり、この広幅の通路ごとに、各区画に分けられて造られたのではないか⁷。

第V層の建物を考える上で、アブ神殿の単室祠(Single shrine)が参考になるであろう(Delougaz 1942 pp. 192-197, Pl. 23)。アブ神殿では、曲り軸の動線、かつ宗教的機能の特化として、複数の控室を設けた方形から単室に代わる変遷過程が確認できる。このプランはテル・グッバ第V層の建物と近似している点がある。アブ神殿の単室祠から、(第VI層)第V層の建物は、元から貯蔵庫としての機能と併せて宗教的な機能を持った施設利用を想定できる。



Fig. 2 テル・グッバ第V層の建物
(小谷 and 井 1981 : Fig. 8を基に作成)

7 全体的には、第Ⅶ層の建築規模を考慮した上で比較した場合、貯蔵性が上がっていると言える。第Ⅴ層の小部屋群を総括して、貯蔵可能量を試算した結果では、93,502—294,960kgの数値が提示されている。ポーレットによる貯蔵量の計算は、主に第Ⅴ層の平面図から試算している。各小部屋群の深さ(Dを2m・3mの二つを想定し、かつ1mあたりの体積における貯蔵可能量を444.4-934.6kgに設定している(Paulette 2015 : p. 431)。

テル・グッバ第Ⅳ層

第Ⅵ－Ⅴ層で中心部を避けた形で建物が築造されていたが、第Ⅳ層では、円形建物の概念は薄れ、中心部が削平され建築物が建てられるようになる（小谷・井 1981：p. 27）。注目すべきは、中心部に築かれたRoom 6と呼称される部屋である（Fig. 3）。この部屋は写真で見る限り、オープンが設けられ、完形品のスカーレット・ウェアが4点以上確認できる⁸。また、バスケット・ハンドル付き土瓶型のスカーレット・ウェアも出土しており、一般的な



Fig. 3 テル・グッバ第ⅣB層 Room6
(Kokushikan Archaeological Mission to Iraq
No. 000010 引用)

スカーレット・ウェアの器形である壺型と特殊な壺型以外の器形を呈するスカーレット・ウェア、この両者が共伴している遺構は、筆者の知り得る限りでは非常にまれである。第Ⅳa層は、彩文土器の出土割合は極端に減少し、刻文または無文土器が主流になっていくと指摘されている（小谷・井 1981：p. 32 and p.42）。

テル・ソンゴルA：Tell Songor A

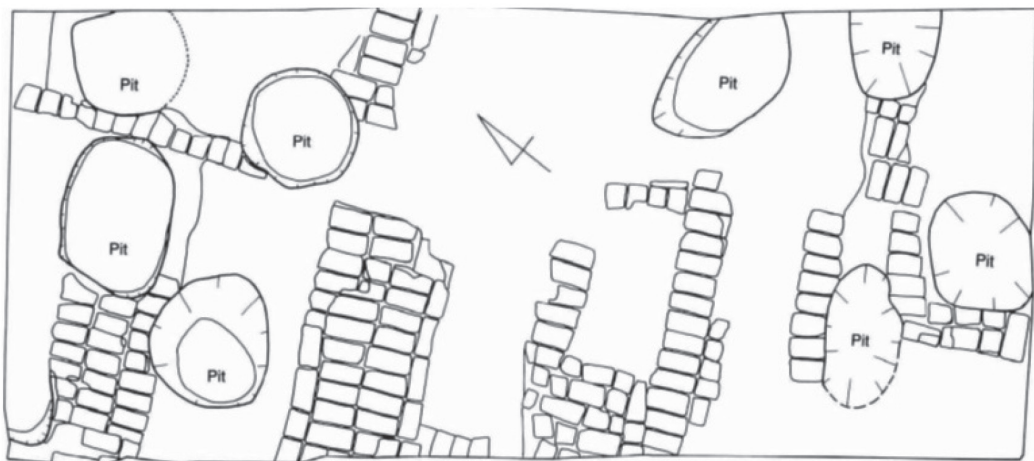


Fig. 4 テル・ソンゴルAの壁部
(Kamta and Ohstu 1993：Fig.1-1 引用)

⁸ Kokushikan Archaeological Mission To Iraq - Picture Records Database - のPhoto No. 00001より確認できる。

テル・ソンゴルAは、テル・グッバから南東の方向に約1 kmの場所に立地している (Fig. 11-②)。遺跡の発掘区が、北区、南区、中央区、西区とわかれている。層位はサマッラ期とウバイド期が中心となっているが、初期王朝時代Ⅰ期と考えられているレンガの組積構造物の一部 (Fig. 4を参照) が、南区、西区で発見されている (鎌田 and 大津 1981 : p.50-51 ; Kamada and Ohtsu 1993 : pp. 183-185)。

発掘者は、ディヤラ川上流域のヘヤット・カーシム遺跡 (後述) の墓域との類似点を挙げ、初期王朝時代第Ⅰ期の組積構造物を墓の一部の可能性があるとは指摘している (同上)。また、スカーレット・ウェアの破片が、北区と中央区の間の区域からも発見されている (同上)。

テル・サブラ : Tell Sabra

テル・サブラは、テル・ソンゴルから約3 km圏内の場所に位置している (Fig. 11-③)。この遺跡には、3つのトレンチ (A、B、C) が設けられ、その内、初期王朝時代Ⅰ期に推定される層位を持つのはAとBトレンチである。Aトレンチでは、8層の層位を持ち、第8層が初期王朝時代Ⅰ期である。対して、Bトレンチは、5層を有し、第5、4層が初期王朝時代Ⅰ期にあたる。両トレンチからは、初期王朝時代Ⅰ期の建物の遺構は、壁体部の一部のみしか発見されていないが、Aトレンチの第7層⁹からは、盛土の痕跡が確認することができ、発掘者は大規模な土木工事を想定している (Tunca 1987 : pp. 11-14)。

Bトレンチも同様に、第5層では、盛土が確認されている (Tunca 1987 : p.19)。これら盛土の痕跡は、ジェムデッド・ナスル期に無人であった土地を初期王朝時代Ⅰ期に開拓した可能性が考えられる。トレンチBの第Ⅳ層は、方形と思わしき壁の一部が確認でき、さらに炭化物と二つの貯蔵用の土器片が出土している (Fig. 5)。これらの痕跡から集落¹⁰であった可能性が考えられている (Tunca 1987 : pp. 19-20)。

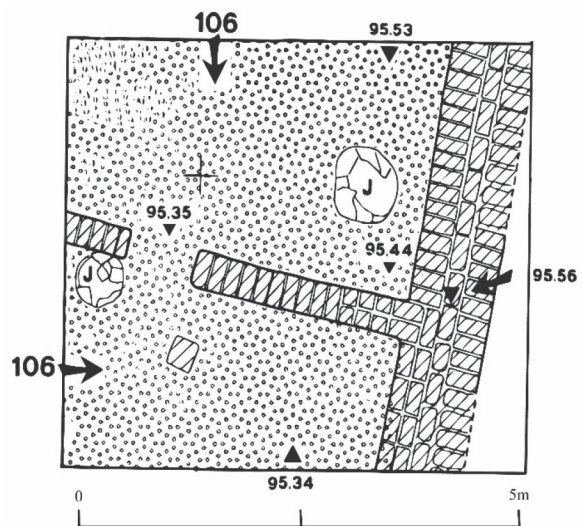


Fig. 5 テル・サブラ Bトレンチ 第Ⅳ層b
(Tunca 1987 : Pl.13 改訂)

9 テル・サブラのAトレンチ第7層は、a-eの5期に細分化されている (Tunca 1987 : p. 11)。

10 初期王朝時代Ⅰ期の集落は、壁の火災痕から初期王朝時代Ⅱ期には放棄されたと指摘されている (Tunca 1987 : p. 19)。

テル・ラズーク：Tell Razuk

テル・ラズークは、バグダードから北東約140kmに位置しており、テル・グッバからは、北へ約6 km離れた場所にある (Fig. 11-④)。また、遺跡の東南には、ナスズ山脈が連なっており、ナリン川と山脈に囲まれている (Gibson 1981 : pp.11-14)。ギブソン等によって、1978年から発掘調査が行われ、テル・グッバと同様の円形建築遺構 (Fig. 6) が発見されている。層位は、6層あり、上層からは中期イスラム時代、ササン朝時代、イシン・ラルサ時代の土壌と墓が発見されている。第Ⅱ-VI層は、初期王朝時代Ⅰ期末～第Ⅱ期の間に円形建物が確認されている。

テル・ラズークの円形建物は、日干し煉瓦が使用され、径27m、高さ4 mの建物である。最終的な円形建物になるまで、複数回の増築が行なわれているのが確認されており、第Ⅶ層では、4回の増築が行われている (Gibson 1981 pp. 29-31)。特に、円形建物北側では、大幅な改築が見られ、北側の周壁の補強は、何かしらの外的要因によるものだと考えられている (Gibson 1981 : p35)。加えて、北側の周壁の壁材には、プラノ・コンヴェックス型レンガ (Plano-Convex)¹¹が使用されて

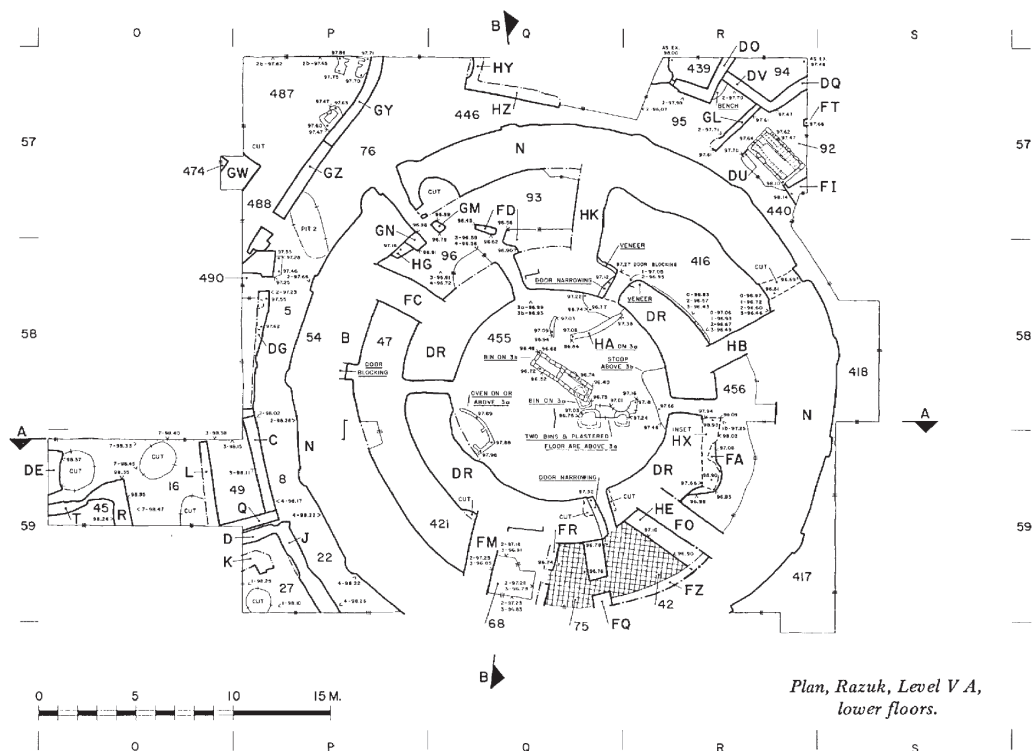


Fig. 6 テル・ラズーク第ⅤA層の円形建物
(Gibson 1981 : Pl. 11 引用)

11 プラノ・コンヴェックス型レンガは、メソポタミア南部の地域を中心に拡散したかまぼこ型のレンガである。初期王朝時代の時期内に築造された多くの建物の資材に、用されていたが、アッカド期に入ると扁平レンガが使用されていく。

いる (Gibson 1981 : pp.63-64)。円形建物中央部は、テル・グッバとは異なり、径約10m以上の中庭となっている。この中央の中庭を囲むようにして、二重の周壁が造られており、テル・グッバの円形建物と一部相似し、周壁によって建物が構築されている。周壁の壁厚は、内周壁が2~2.5m、外周壁が2.5~3mとなっている。テル・ラズークの円形建物は、外部から建物内部へ入る為の出入り口が、Entry Roomの北西側に一箇所だけ配されている。また各部屋へは、仕切壁によって直接行き来が不可能で、必ず中庭を経由する構造になっている。なお、プラノ・コンヴェックス煉瓦の使用は、メソポタミア南部との関連性を窺わせる。

技術的観点から考えた場合、各部屋の天井では、持送り式のアーチ構造を採用しており、South Roomの天井には、葱花アーチを採用している。またほとんどのアーチのスパンが、約5mで造られている。日干し煉瓦で、このスパンを形成するのは異例だと指摘されている (Gibson 1981 : p. 29)。機能としては、壁厚や内部の構造、または円筒印章などの出土遺物から行政的機能を持ち合わせた要塞だと考えられている (Gibson 1981 : pp. 156-160)。スカーレット・ウェアの出土状況は、特段注意する必要がある、この円形建物の全域から見つかっている。また、初期王朝時代Ⅱ期に相当する層位からもスカーレット・ウェアが出土している。さらに第Ⅴ層では円形建物の北西側から土器窯 (Locus 487) が発見されており、土器の生産が行われていたと思われる。

テル・アハマッド・ハッチョウ : Tall Ahmad Al-Hattuとヘイト・カシムⅠ : Kheit Qasim I

両遺跡共、初期王朝時代Ⅰ期の時代に属し、ディヤラ川中流域の中でも、比較的、ナスズ山脈 (Jebel Nasz) 側に位置している。テル・アハマッド・ハッチョウ (Fig. 8-1) は、バグダードから北東約150kmの場所に立地し、2.5km圏内にテル・ラズークがある (Fig. 11-⑥)。一方で、ヘイト・カシム (Fig. 8-2) は、テル・アハマッド・ハッチョウからみて南側に約5km域に立地している (Fig. 11-⑤)。また、ヘイト・カシムは、テル・アブ・カシム (Tell Abu Qasim) (Fig. 11-⑨) と近接している (Sürenhagen 1980 : pp.229-230)。テル・アハマッド・ハッチョウからヘイト・カシムまでカナルによって結ばれていることから、人の往来に関する行路が指摘されている (Gibson 1981 : Pl. 2 and pp.159-161, Forest 2011 : p.30)。両遺跡共、初期王朝時代Ⅰ期には墓域として利用されていたことが判っている。両遺跡の墓域に目を向けると、両者とも墓の構造は同一である。また墓の配置に多少の差異が見られるものの、方向性はどちらも西の方向を向いている (Forest 2011 : p.30)。注目されるのは、ヘイト・カシムの墓域の内、一基だけ上部構造が現存している墓が見つまっている点である (Fig. 7-1を参照)。この墓の上部構造には、持ち送り式アーチが採用されており (Forest 1981 : pp. 108-109)、テル・アハマッド・ハッチョウの墓の上部構造においても、同様の構法が採用されている可能性が考えられる。ただし、埋葬されている被葬者の差は、テル・アハマッド・ハッチョウの墓が複合的に造られているのに対し、ヘイト・カシムの方は2種類に区別されて造られている。つまり、ヘイト・カシムの墓域は、社会的な階級の差を表しているかのように大型の墓の被葬者は基本的に一人であり、独立した構造を持つ (Eickhoff 1993 : pp. 124-125, Forest 1996 : p.130)。発掘者は、エリート層の墓 (Fig. 7-1) は、墓域内でも中心部に位

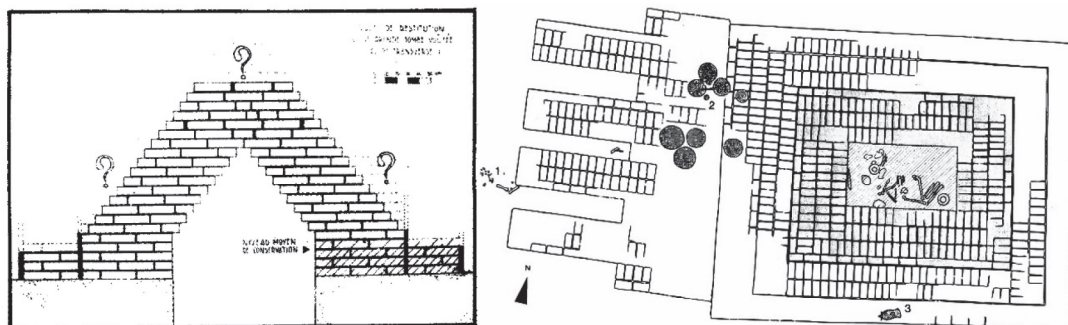


Fig. 7-1 : ヘイト・カシム 墓の上部構造 ; 7-2 : エリート墓
(7-1 : Forest 1981 : Fig.3 引用, 7-2 : Forest 1996 : Fig. 133引用)

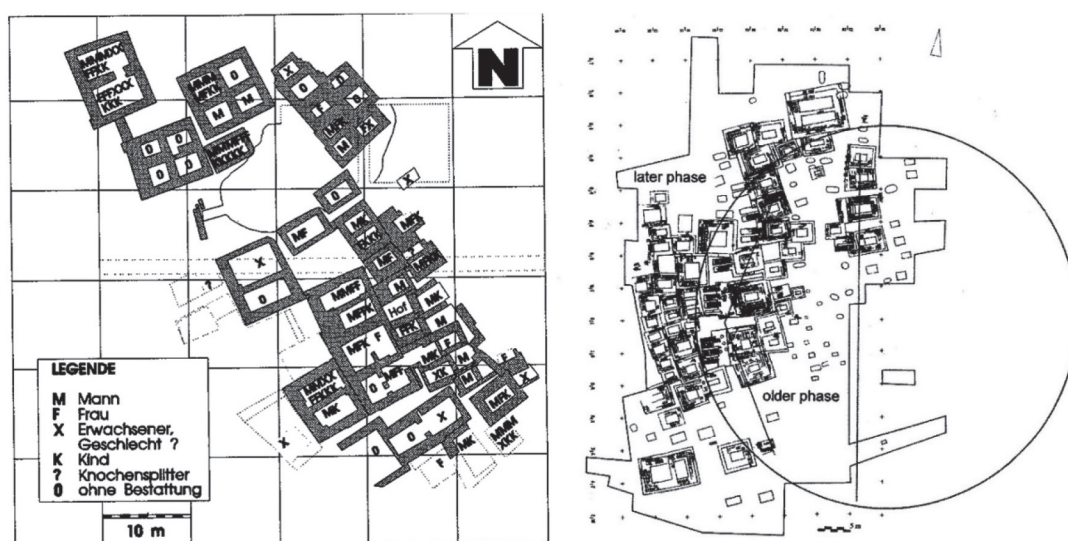


Fig. 8-1 : テル・アハマッド・ハッチョウの墓域 ; 8-2 : ヘイト・カシムの墓域
(8-1 : Erickhoff 1993 : Add. 27 引用, 8-2 : Forest 2011 : Fig. 3 引用)

置していると指摘している (Forest 1996 : p. 198)。このエリート墓の周りに付随して比較的小型の墓が造られている。加えて、出土遺物の差異も顕著であり、青銅製品 (銅剣) は、先の大型の墓に限定され、副葬品として出土している (Forest 2011 : p.30)。スカーレット・ウェアの出土状況は、エリート墓からも出土しているが、一定の偏りがあるのかを確認できない (同上)。

墓域の形成時期に関して、テル・アハマッド・ハッチョウは、初期王朝時代Ⅰ期の時期内で、3期に分けられ形成されている (Eickhoff 1993 : pp. 49-50)。1期に築造された53/20号墓から、イランの彩文土器「アリアバード式土器」と類似しているものが副葬品として出土している (Eickhoff 1993 : add. 43)。ヘイト・カシムも同様に、墓域形成が2期に分けられ、こちらは、中央部のエリート墓群に付随するような形で増築されている (Forest 2011 : p. 30 and Fig. 3)。

テル・マドフル：Tell Madhhur

この遺跡は、テル・グッバから、北の方向約19kmに位置している (Roaf 1984 : p.110) (Fig. 11-⑦)。また、遺跡の周囲約2 km圏内には、テル・ラズークとテル・アハマッド・ハッチョウが位置しており、距離的に近接していると同時に、立地的にもテル・ラズークとテル・マドフルは、近い関係¹²があると指摘されている (Gibson 1981 : p.159)。

テルの形状は、径100m、高さ2 mの楕円形を成し、5層を有している。第Ⅰ層は初期王朝時代Ⅰ期で、第Ⅱ層から第Ⅴ層までが、ウバイド期¹³である。また、テルの頂部は、テル・グッバと同じくイスラム期の墓墳などで占められていた。

初期王朝時代Ⅰ期の層からは、テル・マドフルも例にもれず、円形建物の建築遺構 (Fig. 9) が発見されている (Roaf 1984 : pp.116-118)。しかしながら、イスラム期の墓墳により、大部分が攪

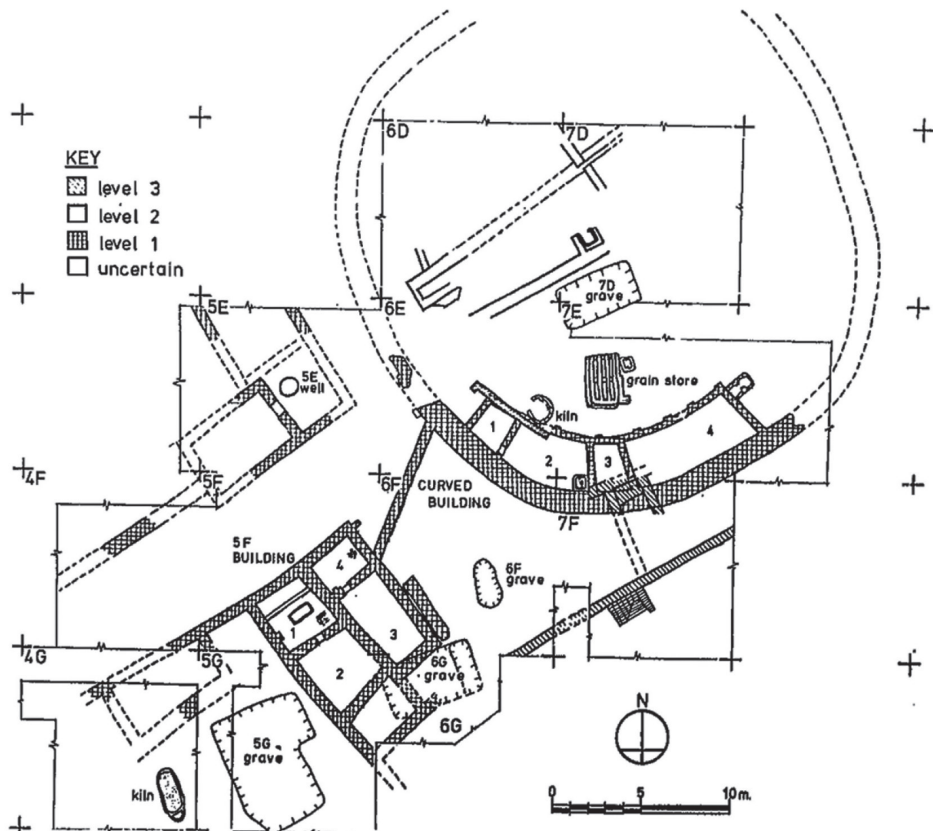


Fig. 9 テル・マドフルの第Ⅰ層の円形建物
(Roaf 1984 : Fig. 3 引用)

12 ハムリン地域から伸びるハムリン山脈に沿った形で、ジャラウラ地域への北方ルート上に、テル・ラズークとテル・マドフルは、位置しているとギブソンによって指摘されている (Gibson 1981 : pp.158-159)。

13 テル・マドフルの第Ⅱ層は、ウバイド後期の層位である。この層位からも、建物の外郭が楕円を描くプランの建築遺構が見つかった (Roaf 1984 : Fig. 2)。

乱されており、円形建物のごく一部しか把握できていない。限られた情報をこの場でまとめると、円形建物は2重の周壁、つまり外周壁と内周壁によって形成されており、外周壁と内周壁内の通路が仕切られ一連の部屋が設けられている。復元では、径約30mと想定されている (Roaf 1984 : Fig. 3)。円形建物の内部には、テル・ラズークの円形建物と同じく、中央部付近に、貯蔵庫が確認できることから、中庭を形成していたと思われるが、現状では、推しはかることができない。また、円形建物の西側には、小部屋群 (図面上 : 5Fと5E) が建てられている。スカーレット・ウェアが出土するのは、円形建物か5Fの小部屋群からである (Raof 1984 : p.139)。円形建物の西側に墓が掘られているが、そこからはスカーレット・ウェアは一点も出土せず、代わりに青銅製品が副葬品として発見されている。加えて、5Eの小部屋のRoom 1に、井戸が設けられている。5Fの小部屋群は、貯蔵庫、祭壇 (5F Room 1) の機能が備わっている部屋が指摘されており (同上)、儀式的な用途で、井戸水を利用していたのかもしれない。

テル・マドフルの初期王朝時代Ⅰ期の建物に関する機能は、明確な答えは提示されていないが、貯蔵庫や他の円形建物と類似した構造を持つことから、行政施設または神殿など複合的な機能が備わっていたと思われる。

テル・スレイマ : Tell Suleimehとテル・アブ・カシム : Abu Qasim

テル・スレイマとテル・アブ・カシム遺跡の遺構図は入手できなかった。しかし、重要な遺跡であるため、簡単な概略をこの場で紹介したい。テル・スレイマは、ディヤラ川の東岸に位置し、ジャラウラに隣接している (Fig11-⑧)。ウルナム王の碑文からこの遺跡の古代名が判っており、「awal」と呼ばれていた (Graef 2009 : p.29)。

テル・スレイマ遺跡は、第Ⅲ層がイシン・ラルサ時代、第Ⅳ-Ⅶ層がアッカド時代、第Ⅷ層が初期王朝時代Ⅲ期の層を有する。テル・スレイマ遺跡の北東からは、“Oval-shaped Structure” と呼ばれる建築遺構が発見されている。この“Oval-shaped Structure” は、テル・グッパの円形建物と類似していると指摘されている (Rasid 1981 : p.218)。この建物は、5重の同心円状の周壁を持ち、径が約25mで構築されている。周壁幅は、全幅6mの厚さがある。周壁に囲まれている中央部は、13×18mの空間が設けられており、周壁の高さは3～4mにも達している。この床面からは、日干し煉瓦で造られた基壇と炉が発見されており、宗教的な機能を有していたと考えられる。中央部の空間はアッカド期まで使用されていたが、正確な時代はわかっていない。しかし、スカーレット・ウェアの出土から考えても、初期王朝時代に属していた可能性は考えられる。

テル・アブ・カシム (Fig. 11-⑨) に関して、残念ながら一般に公開されている情報量は限定されている。わかっていることは、初期王朝時代Ⅰ期の方形プランの建物の遺構が発見されていることである。この建物は壁厚6mの壁によって構築され、30m×30mの規模を誇っている。中央部は、中庭を設け、周りに4つの部屋が造られている。この部屋から、スカーレット・ウェアと彩文された人型・動物型の像が出土している (Roaf and Postgate 1981 : p.171)。また建物の機能は、穀物庫と考えられている。一方で、平面プランにおいては、テル・グッパやテル・スレイマ (Tell Su-

leimeh)、テル・ラズークといった周壁を幾重に巡らせた建物であったと指摘されている (Renette 2009 p. 84)。

考察

ディヤラ川中流域では、初期王朝時代Ⅰ期の層位を持つ遺跡は、必ずといってよいほどスカーレット・ウェアの出土が確認できる。加えて、スカーレット・ウェアの出土する共通的な傾向は、墓の副葬品か神殿ないしは行政的性格を帯びた建物から出土するという2つのパターンが考えられる。ただし、注意が必要で、遺跡規模に対して完形の品が出土する割合は、総体的にディヤラ下流域の都市遺跡では、ほぼ墓の副葬品として出土している。住居址から出土する場合、住宅に内設された墓、すなわち家内埋葬の墓から出土している。このような出土状況がディヤラ川下流域の都市遺跡を中心として見られる。

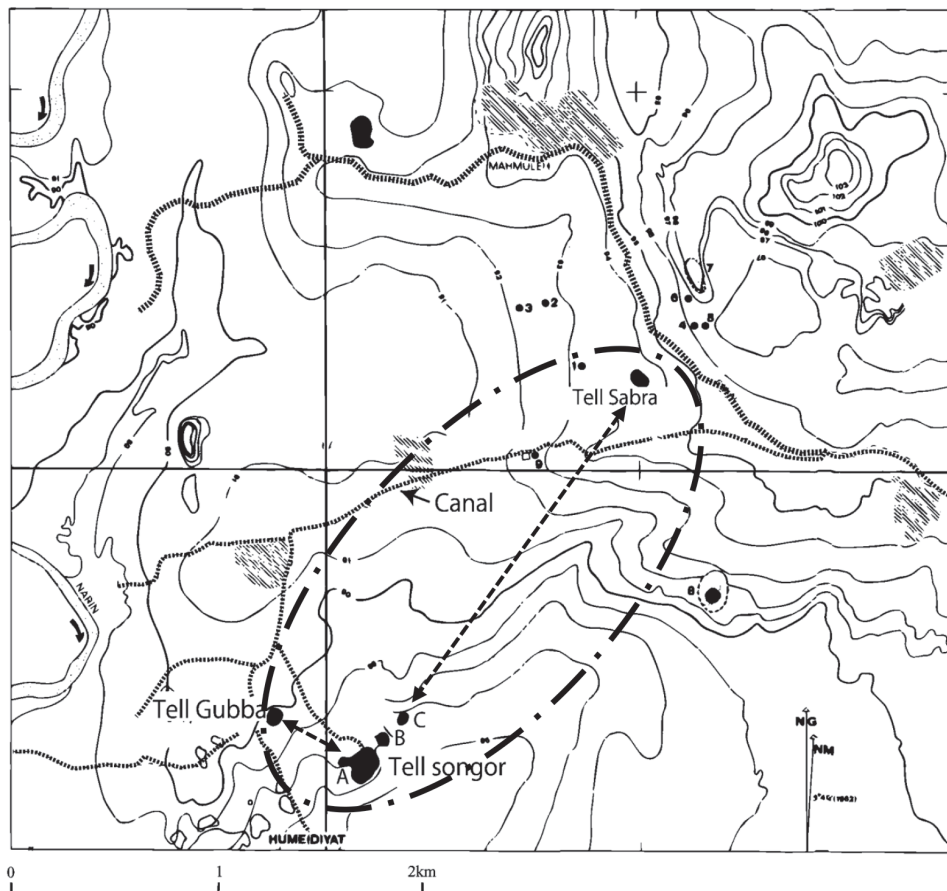


Fig. 10 テル・グッバ、テル・サブラ、テル・ソングルの3遺跡の位置関係
(Tunca 1987 : Pl. 2 加筆)

一方で、特に興味深いのは、ディヤラ川中流域の遺跡分布である。先にも述べた通り、墓域の遺跡と円形建物を持つ遺跡、方形建物を持つ遺跡は、近い立地関係にある。具体的な例として、ヘイト・カシムは、テル・アブ・カシムとお互い近接した場所に立地している。加えて、テル・アハマッド・ハッチョウを中心に半径5km圏内に、テル・ラズーク、テル・マドフルがある。これを踏まえて考えた場合、テル・ソンゴルA¹⁴には、テル・グッパ、テル・サブラが位置している。

① テル・ソンゴルA（墓域?）⇔テル・グッパ（円形）、テル・サブラ（方形）

② ヘイト・カーシム（墓域）⇔テル・アブ・カシム（方形）

③ テル・アハマッド・ハッチョウ（墓域）⇔テル・マドフル（円形）とテル・ラズーク（円形）

つまり、ディヤラ川中流域の遺跡は、墓域と円形、方形の建物が、2km圏内で隣接して分布している（Fig.9を参照）。それも、それぞれが、ディヤラ川中流域内で、区画を形成しているかのように、遺跡の集中している場所が明瞭である。類似したプランを持つ円形・方形建物¹⁵が、祭祀施設あるいは行政施設の役割を有し、それに関連した職業の人間が亡くなった際、近隣に設けられた墓域に埋葬されていたのではないだろうか。筆者は、この遺跡分布に関する一定の密集を、「区画」と呼びたい。これら「区画」とそれぞれの遺跡は、カナルによって繋がっていたと思われる（Fig.10と11を参照）。ハムリン盆地内においては、都市のような巨大な社会組織を築き上げたのではなく、集落規模の組織が点在し連携して機能分化を果たしていたと考えるのがよいと思われる。つまり、テル・アハマッド・ハッチョウやヘイト・カシムの墓域にあるエリート墓は、「区画」における指導者的な存在を証明するものであると考える。さらに、テル・グッパ第Ⅵ層からⅤ層にかけて見られる倉庫群は、余剰生産物を格納していたと考えれば、初期王朝時代Ⅰ期において、ある程度の人口と政治的機能を有していた社会を築くことが可能だと考えられる。現に、テル・マドフルやテル・ラズークにおいて、円形建物内に貯蔵庫が置かれている。これらから、初期王朝時代Ⅰ期には、ハムリン盆地内で、メソポタミアのいわゆる「神殿経済¹⁶」に類似した経済が、存在していたと考えることができる。

テル・グッパ第Ⅳ層以降、第Ⅲa層は、初期王朝時代Ⅲ期からアッカド期と比定されており、初期王朝時代Ⅱ期に関しては第Ⅲb層が想定されるが、報告されていない。しかし、スカーレット・ウェアから無文土器へと変わることから、初期王朝時代Ⅰ期のような文化を持つ集団は、ハムリン盆地内で減少したのではないかと¹⁷。総じて、ジェムデッド・ナスル期から初期王朝時代Ⅰ期にかけ

14 テル・ソンゴルAが墓域と確定しているわけではない。しかしながら、テル・ソンゴルAを墓域と想定したならば、それに近接するテル・グッパが神殿・行政施設都市的機能、テル・サブラが集落と位置付けて考えてもいいだろう。

15 円形・方形建物の規模が、径約30mと均一である。

16 神殿にいったん穀物を納め、それを再分配し、神官によって経済が運営されていたという考えであるが、現在では、この考えの一部が否定されている（Postgate 1992; p. 1992）。

17 不確実性ゾーンといわれる天水農耕が、確立できない地域がメソポタミアの外周一帯に広がっている（Wilkinson 2014）。これは、年間降水量の増減によって、農耕が不安定なことから、当該地域の集団は「半農半牧」を生存戦略として採用している（Wilkinson 2014: pp. 60-65）。

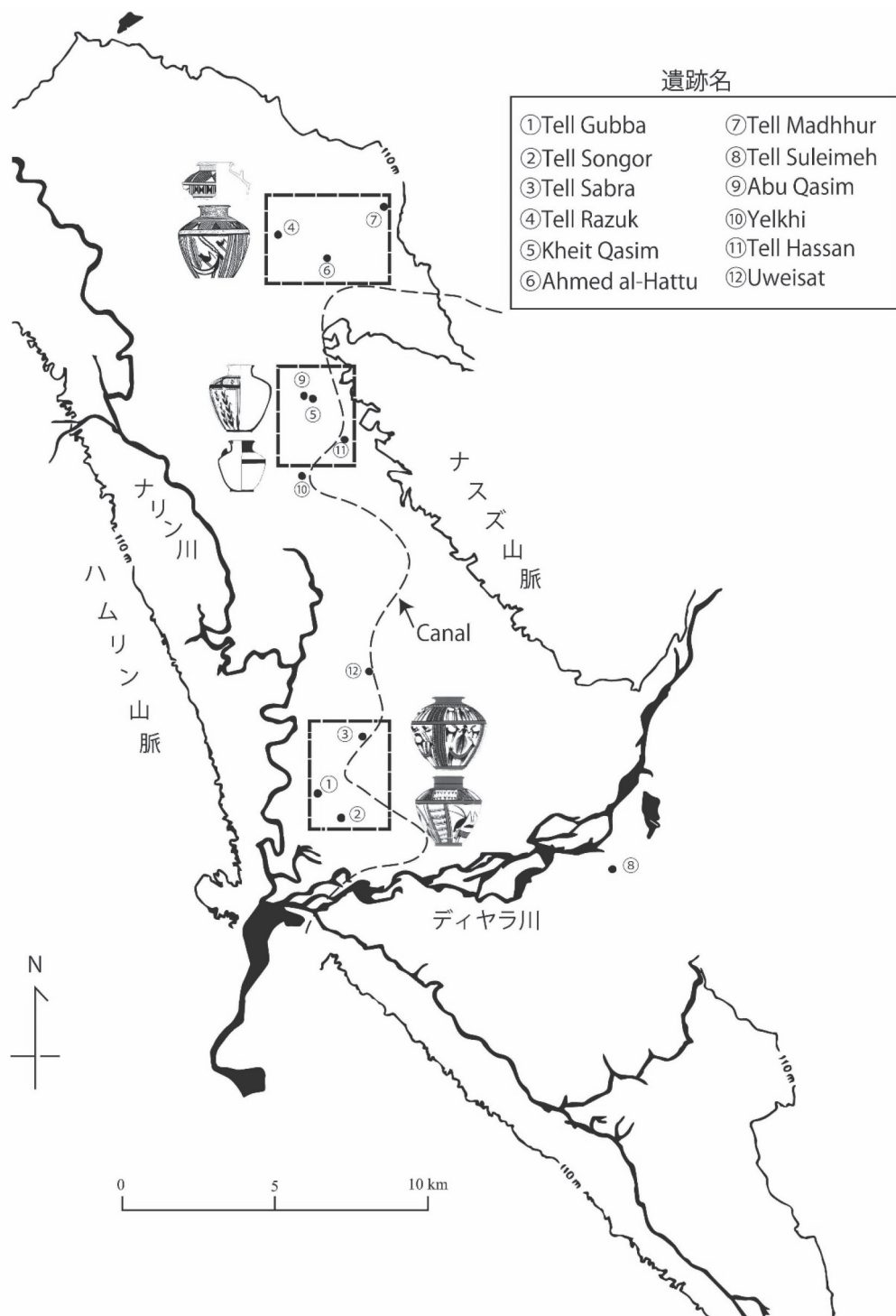


Fig. 11 初期王朝時代Ⅰ期におけるハムリン盆地内の各遺跡の分布図
(Killick 1988 : Fig. 4を元に作成)

て、ディヤラ川中流域へ様々な人間が移住してきた。そして、新しく移住した人間によって、円形・方形建物＝居住（祭祀）と墓域がセットとなる「区画」といった人工的な遺跡分布になったのだろうと筆者は考えている。そして、様々な人間が一つの集団を形成する場合、特徴的でわかりやすいシンボルの元、結束する必要がある。それが、土器であるスカーレット・ウェアだったのではないだろうか。興味深いのは、スーサから出土した彩文土器である。この彩文土器には、いわゆる壇塔や牛車などの文明的な文様が施文されており、極めてメソポタミア南部の影響を印象付けるものである。これは、憶測の域をでないが、初期王朝時代Ⅰ期末から初期王朝時代Ⅱ期頃にかけて、ハムリン盆地内の一部の集団がメソポタミア南部、イランへと移動した可能性も捨てきれない。円形という建築概念を持った集団、すなわち、ハムリン盆地に居住していた集団が、カフジェの楕円形神殿（初期王朝時代Ⅱ期に築造）に影響を及ぼした可能性も視野に入れる必要性がある。

謝辞

この研究を遂行するにあたり、大変、丁寧に指導してくださった小口和美先生に感謝いたします。自分の研究の主軸となるテル・グッバ遺跡の発掘者としての、貴重なご意見もいただきました。国士館イラク古代文化研究所の先生には、様々なご助言を賜り、研究に新しい見地を生み出すことができました。また、貴重なお時間を割いてまで、査読して頂いた先生にお礼申し上げます。

参考文献

<邦文>

井・小谷

1981 「テル・グッバ」 藤井秀夫編「イラク ハムリン調査概報」『ラーフィイダーン』第2巻、pp. 16-49。

岡田保良

1993 『メソポタミアにおける建築空間の特性に関する史的研究』京都大学

1993 「『メソポタミア』についての覚書」『ラーフィイダーン』第14巻、pp. 267-274。

小口和美

2003 「考古学から見たエンシュムンナの領域—エンシュムンナの西方拡大—」『西アジア考古学』第3号、pp. 105-110。

藤井秀夫

1981 「まとめ」 藤井秀夫編「イラク ハムリン調査概報」『ラーフィイダーン』第2巻、pp. 125-179。

ムアイヤッド・S.B. ダメルジ（著）、高世富夫・岡田保良（訳）

1987 『メソポタミア建築序説—門と扉の建築術』国士館大学イラク古代文化研究所、東京。

<欧文>

Burhan, S. S.

2001 "The Excavation of Tell al-Nmil", *Sumer* Vol. 51, pp. 1-56 (in Arabic).

2011 A Brief Report on The Al-Adhaim Dam Salvage Project, in Miglus, P. A. and Mühl, S. (eds), *Between the Cultures: The Central Tigris Region from the 3rd to the 1st Millennium BC: Conference at Heidelberg, January 22nd-24th, 2009 (HSAO)* Band 14, pp. 385-394,

Black, P and Green, A

1992 *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia: An Illustrated Dictionary*, London, The Trustees of the British Museum Press.

Crawford, H

1972 "Excavations in the Swamps of Sumer", *Expedition* 14 no 2, pp. 12-20.

1991 *Sumer and the Sumerians*, Cambridge, Cambridge University Press.

Bravo, D. F.

2014 "Scarlet Ware": Origins, Chronology and Developments, in Marc Lebeau (ed.), *ARCANE Interregional*, Vol I: Ceramics, Brepols. pp. 131-148.

2017 "(R)eplica + (M)imesis / (L)andscape = (I)dentity. The Scarlet Ware Formula: in Implementing Meanings", in Silvana Di Paolo (ed.), *Implementing Meanings: The Power of the Copy between Past, Present and Future (Altertumskunde des Vorderen Orients)*, Band. 19, pp. 165-179.

Brun, A. Le

1971 "Recherches stratigraphiques à l'Acropole de Suse, 1969-1971", *Cahiers de la DAFI*, Vol. 1, pp. 163-216.

Delougaz, P.

1940 *The Temple Oval at Khafajah* (OIP 53), Chicago, The University of Chicago Press.

1942 *Pre-Sargonic Temples in the Diyala Region* (OIP 58), Chicago, The University of Chicago Press.

Delougaz, P. and Lloyd, S.

1967 *Private Houses and Graves in the Diyala Region* (OIP 88), Chicago, The University of Chicago Press.

Dieulafoy, J. N.

1888 *A Suse, journal des fouilles, 1884-1886*, Toronto, University of Toronto Press.

Dittmann, R.

1986 Susa in the Proto-Elamite Period and Annotations on the Painted Pottery of Proto-Elamite Khuzestan, in Finkbeiner, U. and Röllig, W. (eds.), *Ĝamdat Nas.r Period or Regional Style?*, pp. 171-198, Wiesbaden, Reichert Press.

Eickhoff, T.

1997 *Grab und Beigabe : Bestattungssitten der Nekropole von Tall Aḥmad al-Ḥattū und anderer frühdynastischer Begräbnisstätten im südlichen Mesopotamien und in Luristān*, München, Profil-Verl Press.

Frankfort, H., Lloyd, S, and Jacobsen, J.

1940 *The Gimilsin Temple and the Palace of the Rulers at Tell Asmar* (OIP 43), Chicago, The University of Chicago Press.

Forest, J.D.

1980 “Kheit Qasim I, Un cimetière du troisième millénaire dans la vallée de Hamrin, Iraq”, *Paléorient* Vol. 6, pp. 213-220.

2011 Some Thoughts about the Scarlet Ware Culture, in Miglus, P. A. and Mühl, S. (eds), *Between the Cultures: The Central Tigris Region from the 3rd to the 1st Millennium BC: Conference at Heidelberg, January 22nd-24th, 2009* (HSAO) Band 14, pp. 29-35.

Gibson, McG.

1981 *Uch Tepe 1 (Hamrin Reports 10)*, Chicago, University of Chicago Press.

1990 *Uch Tepe 2 (Hamrin Reports 11)*, Chicago, University of Chicago Press.

Ii, H.

1993 “Category of Tell Gubba from Level VII”, *Al-Rafidan*, Vol.14, pp. 209-265.

Kamada H. and Ohtsu, T.

1993 “Third Report on The Excavations at Tell Songor”, *Al-Rafidan*, Vol.14, pp. 152-182.

Killick. R.G. and Young, T. C.

1988 “Natural and historical landscape of Tell Rubeidheh”, Killick.R.G (ed.) *Tell Rubeidheh: an Uruk Village in the Jebel Hamrin: Iraq Archaeological Reports, Vol. 2*, pp. 1-18, British School of Archaeology in Iraq.

Kokushikan Archaeological Mission to Iraq - Picture Records Database -

URL : [http://www.kokushikan.ac.jp/iraq_database/file/Tell_Gubba.p df](http://www.kokushikan.ac.jp/iraq_database/file/Tell_Gubba.pdf)

Accessed : 2021/ 8/ 6.

Manuela Heil

2011 “Early Dynastic Round Buildings”, Miglus, P. A. and Mühl, S. Heidelberg (eds.), *Between the Cultures: The Central Tigris Region from the 3rd to the 1st Millennium BC: Conference at Heidelberg, January 22nd-24th, 2009* (HSAO) Band 14, pp.37-45.

Matthews, R.

2002 *Secrets of the Dark Mound Jemdet Nasr 1926-2002* (Iraq Archaeological Report 6), Warminster, Aris & Phillips Press.

Moon, J. E and Roof, M.

1987 “The pottery from Tell Madhur”, *Sumer* Vol. 43, pp. 128-158.

Nagel, W.

1964 *Djamdat Nasr-Kulturen und Frühdynastische Buntkeramiker*, Berliner Jahrbuch für Vor- und Frühgeschichte vol. 8, Berlin, Otto Press.

Paulette

2015 *Grain Storage and The moral economy in Mesopotamia (3000-2000 BC)*, Chicago, University of Chicago Press.

Perkins, A. N.

1949 The comparative archeology of early Mesopotamia, *Studies in Ancient Oriental Civilization*, no. 25, Chicago, University of Chicago Press.

Postgate, J. N.

1992 *Early Mesopotamia: Society and Economy at the Dawn of History*, London, Routledge Press.

Potts, D.T.

1982 The French Excavations at Kheit Qasim Himrin, *Sumer*, Vol. 15, pp. 107-114.

Rasid, D. F

1983 Tell Suleimeh, *Journal Article Excavations in Iraq, 1981-1982*, Vol.45, No.2, pp. 221-222.

Roaf, M.

1984 “Tell Madhhur A summery Report on The Exvavations”, *Sumer*, Vol. 42, pp. 108-124.

1917 *The Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*, New York, Checkmark Books Press.

Renette, S

2009 A Reassessment of the Round Buildings in the Hamrin Valley (Central Iraq) during the Early Third Millennium BC, *Paléorient*, Vol. 35.2, pp. 79-98.

2011 “The Trans-Tigridian Corridor in the Early Third Millennium BC”, in Graef, K. and Tavernier, J (Eds.), *Susa and Elam. Archaeological, Philological, Historicaland Geographical Perspectives*, pp. 43-50.

Steinkeller, P.

1981 Early History of the Hamrin Basin in the Light of Textual Evidence, *Uch Tepe I* (Hamrin Reports 10), pp. 163-168, Chicago, University of Chicago Press.

Strange, L. G.

1905 *The Lands of the Eastern Caliphate: Mesopotamia, Persia, and Central Asia, from the Moslem Conquest to the Time of Timur*. Cambridge, Cambridge University Press.

Sürenhagen, D.

1980 “Die frühdynastisch I-zeitliche Nekropole von Tall Ahmad Al-Hattu”, *Paleorient*, Vol. 6, pp. 229-232.

2011 “Urban Centers and Rural Sites in the Diyala Region During the Early Dynastic I and II”, in Miglus, P. A. and Mühl, S. (eds), *Between the Cultures: The Central Tigris Region from the 3rd to the 1st Millennium BC: Conference at Heidelberg, January 22nd-24th, 2009 (HSAO)* Band 14, pp. 5-28.

Trümpelmann, L

1989 “Zum Frühgeschichtlichen Silobau im Alten Mesopotamien” Meyer, De et Haerinck, E (eds.), *Archaeologia iranica et orientalis : miscellanea in honorem Louis Vanden Berghe*, pp. 49-83, Belgien, Peeters Press.

Tunca. Ö.

1987 *Tell Sabra, Akkadica*, Supplementum V (Hamrin report), leuven, Peeters Press,